

わたしの地図ノート

阿部三樹 2004年12月 A5版 248頁 株式会社エピック市川

千 歳 壽 一

『さあ、きょうは千葉県の地図をかきましょう。』小学4年のある日のこと、私たちの社会科の授業は、若い女の先生のこの言葉から始まった。という書き出しで、終戦から程ない昭和24年当時の地理の授業の一コマとともに、著者が地図を通して地理学への目を開かされた状況が描かれている。著者は、大学で地理学を専攻し、地図会社に就職して地図作成に当たっていた。そして、時代の推移で会社が地図を利用する事業にも業務を拡大したのに伴い、環境や開発などの調査業務に携わるようになった技術者である。地図の作成と利用を通して体得した知識経験を、地図学の基礎的な事項に投影しながら、「わたしの地図ノート」として書き貯められたものが、本書である。それが独自の地図学テキストを編み出すことになった。全編は、四つの部分に大別され、それぞれ章に別れ、全体で10章からなっている。

I 子供時代・学生時代の地図ノート は、4章から構成され、地図学習の第一歩から空中写真の学習までの記述となっている。第1章に相当する1. はじめて地図を描く は、先に述べたように、小学校での地図との出会いから始まっている。地図帳の関東地方のページに方眼を書き、新しい画用紙にも同じように方眼を引き、千葉県の輪郭、鉄道、市役所などを書き入れたこと、山や台地などをクレヨンで塗り分けたことなどが記されている。更に、地図の拡大・縮小に話が及び、その辺りから授業の思い出から離れて、縮尺の意義、必要性、使用の歴史など、学術的な内容に高度化していく。2. 地形模型を作る と続いて、中学生に進む。夏休みの宿題で、ボール紙を等高線に沿って切り、それを積み上げ、苦心して地形模型を作ったことが述べられている。それから、等高線について、意義、歴史、作図テクニック、利用法と進められていく。3. 5万分の1地図を歩く では高等学校に進学して、5万分の1図を持って、

近くの印旛沼にグループで自主巡検した話から始まり、地形図の解説が行われる。意義、歴史、図法、図式記号から標準地域メッシュに及ぶ。4. 空中写真と出会う には、大学に入学して地理学コースに進み、初めて本物の空中写真に接したときの喜びや、肉眼実体視の習得に苦心させられたことが語られている。昨今、空中写真は不動産屋の広告でも珍しくなく、実体鏡は数多く用意されている。しかし著者は、空中写真利用における肉眼実体視の必要性を説き、実体視の原理や練習法から、更に空中写真測量の原理、利用法まで解説している。

II 職業としての地図ノート の三つの章は、専門的な地図の作成と利用を示している。5. 地図を作る仕事につく の内容は、地図作成中に生じたエピソードの紹介と地図作成の工程の説明である。最近いくつかの大学の「地図学」の講義内容を見た限りでは、地図の作成過程がほとんど入れられていない。地理学では、地図は所与の物として、分析と併用して利用する対象としているように見える。主題図作成も含めて、地図作成こそ、地理学が現実社会に貢献できる分野であるのに、残念な傾向である。本書の説明で、十分な理解に達するとは考えにくいだが、作成の基本的な筋道を知ることができる。6. 変わった地図の仕事をする に書かれているのは、土地分類図を中心とした主題図である。様々な土地分類図とその利用について述べられている。7. 地図を使う仕事に変わる で扱われているのは、目的をもって作成された地図の数々である。主として、都市計画や地域開発のためであるが、主題図の紹介だけでなく、計画策定のプロセスを通して、どこでどのような図が必要になるのか、例解されている。

III 趣味の地図ノート というものの、ここも単に趣味に終わっていない。8. 地球儀グッズを集める という表題であるが、地球儀の話は導入部で、丸い地球を平らな地図に描くための、測地学

と地図投影の入門篇といえそうである。9. 世界地図の歴史に親しむ だけは、表題と内容がほぼ完全に一致している。

IV 進化する地図ノート 10. 地図の夢 がフィナーレで、いろいろな話が、一つの章にエッセイ風に散りばめられている。

「世は地図ブームといわれているのに、地理学で地図の利用が減った」という声をよく聞く。「地理学の地図離れは、自殺行為だ」という嘆きも聞く。地理学の地盤沈下と地図使用の減少は、相関関係があるのかも知れない。因果関係の解明

はさておき、地理学を学ぶ者にとって、地図のもつ表現力、説得力を生かして用いる知識、技術を身に付けることは、レーゾンデートルではなからうか。

本書は、地図作成から利用に至る本格的な地図学を、日常感覚に根差す読み物風に記述した、優れた地図学の入門書である。多くの地理学入門者が、本書を読んで、地図に親しみを抱き、地図を積極的に利用するようになることを期待したい。

遠い過去の話ではあるが、幼かった本書の著者に地図への目を開かせた女性教師に、感謝の意を捧げたい。

